

「口腔機能低下症」対応が歯科界を変える

「噛めない」という訴えで来院した患者に、どうあらず歯を作らせたとしても、噛めない原因はなかつたとしてもそれは立派な誤診です。日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック院長の菊谷武氏は、これまでの歯科界の「噛めない原因」は「歯」という固定観念が超高齢社会において問題となっており、その突破の鍵は「口腔機能低下症」へのアプローチにあると指摘する。同氏が昨年4月に新しく保険に導入された意義や、歯科界に何をもちたのかを聞いた。

「噛めない原因＝歯」からの脱却



日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック院長 菊谷 武氏

平成30年度診療報酬改定で新病名「口腔機能低下症」への対応が盛り込まれました。保険導入の社会的背景をどのように捉えていますか。

菊谷 今までの歯科界は、器質的な修復・解剖学的な回復により口腔機能を維持・向上させる概念でずっと取り組んできました。高齢化が進み、歯が何本あ

なくても口腔機能障害(咀嚼障害)を訴える人が一定数出てきました。それがこれに対して従来通り、義歯作製や歯の修復・保存で対応する「歯があれば噛めるはず」という固定観念から脱却できている節がありました。

もしも噛めない原因が歯だけにあるのだとしたら8020達成者が51.2%にも上っている現在、咀嚼障害は保険導入は本来、取り組み

の実績が先にあり、それに対して保険病名・点数が付いてくるものですが、今回はほとんど実績がない「口腔機能低下症」という概念が先に打ち出されました。それだけ、

早急に歯科医療現場に取り込まなくてはならない、待たなしの状態なのだと思えます。歯科診療所では、「口腔機能低下症」をどのようにに

は、噛めない原因は「歯」ではない、歯がなくても噛めるという考えを取り入れるのが望ましいのでしょうか。菊谷 個人的には、咀嚼治療、歯周病治療、欠損補綴に次いで四番目の病名だと思

っています。「うちでは咀嚼治療はやらない」と言っている人が言わないように、歯科医師である以上は「口腔機能低下症」への対応はうちではやらない」とは言っていないのです。

なぜなら、咀嚼障害への対応は、歯の修復や、義歯調整とも並列して診られるものではない、歯がなくても噛めるという考えを取り入れるのが望ましいのでしょうか。菊谷 個人的には、咀嚼治療、歯周病治療、欠損補綴に次いで四番目の病名だと思

国民運動に医院が参加できる

という大きな流れの中に、「オーラルフレイル」が含まれています。フレイルは衰えがあるものの、まだ健常な状態に戻すことができる時期で、

全身のフレイルの原因の一部に口腔機能低下があり、歯科がフレイルの改善、悪化予防に貢献できるという考え方に賛同できるという考え方を

です。オーラルフレイルは、わずかなむせや食べこぼし、滑舌の低下など、口腔機能が低下した状態を示す国民向けの

キャッチフレーズで、「口腔機能低下症」はこの国民運動に個々の歯科医院が関わられるようになるための病名とも

も言えます。地域で行われている介護予防事業に歯科医師会の会員として参加する場合は、事業費から出向費が出ますが、

歯科医院の中で取り組んだ場合は病名がなくて、ボランティア以外に対応できない

多くの自治体で「後期高齢者の健康診査」が始まっています。先導的に参加している歯科医師会などは、今まで病名がなかったために、自分で検査したにもかかわらず、

疾患の疑いのある人を診療所ではなく介護予防教室に送らざるを得ない状況にありました。

それが「口腔機能低下症」という病名ができたおかげで、地域の健康診査で見つけた

口腔機能低下症に関わる検査

把握する症状	検査項目	使う機器等
口腔衛生不良	舌苔の付着程度	視診
口腔乾燥	口腔粘膜潤湿度	口腔水分計
	唾液量	サクソテスト(ガーゼ)
咬合力低下	咬合力検査	感圧フィルム
	残存歯数	残存(機能)歯数
舌口唇運動機能低下	オーラルディアドコネシス	健口くんハンディ スマホアプリなどで代用可
低舌圧	舌圧検査	舌圧計
咀嚼機能低下	咀嚼率検査	グミゼリー、グルコセンサー
	咀嚼能力スコア法	グミゼリー
嚥下機能低下	嚥下スクリーニング検査	アンケート(EAT-10)
	自記式質問票	アンケート(聖隷式嚥下質問用紙)

※菊谷氏の資料を基に編集部が改編

地域包括ケア参画への第一歩

「口腔機能低下症」から取り組む人はずかしくありません。地域包括ケアシステムに参画するためには、患者さんの「生活の質」まで包括して考えられるようにならなければなりません。

今歯科大学・歯学部に通っている学生は、このように年代の先生は当然習ってきいていない概念です。今回「口腔機能低下症」への対応が保険に導入されたことで、歯科医師の意識改革に大きな力になると思っています。

歯科医院にオススメの一冊

チェアサイド オーラルフレイルの診かた(第2版)

口腔機能低下症にまつわる診断フローチャートや歯科医院としてより効果的、確実な対応法が理解できる。さらに、口腔機能低下症の前段階にあたるオーラルフレイルに関して、この一冊で対応法が分かる。



菊谷武氏/A4判変型 138頁/6480円税別 込/医歯薬出版

「口腔機能低下症」から取り組む人はずかしくありません。地域包括ケアシステムに参画するためには、患者さんの「生活の質」まで包括して考えられるようにならなければなりません。

今歯科大学・歯学部に通っている学生は、このように年代の先生は当然習ってきいていない概念です。今回「口腔機能低下症」への対応が保険に導入されたことで、歯科医師の意識改革に大きな力になると思っています。

また、「口腔機能低下症」は、歯周病の治療や、義歯調整とも並列して診られるものではない、歯がなくても噛めるという考えを取り入れるのが望ましいのでしょうか。菊谷 個人的には、咀嚼治療、歯周病治療、欠損補綴に次いで四番目の病名だと思